

8 3. <新型インフルエンザと下水道>

メキシコで発生したブタ由来の新型インフルエンザは、国内での感染拡大も一先ずは終息傾向に向かっているようです。インフルエンザの主要な感染経路は、患者の咳等に含まれるウイルスを吸い込む「飛沫感染」と飛沫に汚染されたモノに触れることでウイルスが手に付着し目や鼻、口の粘膜等を通じて感染する「接触感染」であるため、下水道との関係は一見薄そうにも思えます。ブタ由来インフルエンザについては、下水中での挙動等は現時点では全く知見がありませんが、ヒトへの感染が危惧されている高病原性鳥インフルエンザについて、世界保健機関（WHO）が 2007 年に公表した「鳥インフルエンザ：動物、食品、水に関する Q&A」に下水道での挙動や予防措置が示されています。これによると、インフルエンザウイルスは、感染したヒトや鳥の糞便中にも放出されるが、下水道がヒトの集団感染源にはなりそうにないことや、一般的に下水処理過程ではウイルス濃度がかなりの割合で減少すること、また、流行発生時には高濃度のウイルスが下水中に含まれるため、下水処理場の作業従事者の曝露リスクを考慮する必要があることなどが示唆されています。このようなことから、ブタ由来インフルエンザについても、下水道を介した感染拡大の可能性は極めて低いものと推察されますが、流行時には、日頃にも増して適正な処理や衛生管理の徹底に努めることが望まれます。また、秋以降再び流行する可能性も指摘されていることから、新たな流行発生による感染拡大が生じた場合にも下水道の機能を維持するため、物資や人員の確保等について事前の対策が重要と考えられます。

【参考】

http://www.who.int/foodsafety/micro/AI_QandA_Apr07_EN.pdf

(英文原文)

http://www.fsc.go.jp/sonota/tori/tori_iinfq4_kokusai_7.pdf

(概要仮訳)

<総括主任研究員 橋本敏一>

※ J S 技術開発情報メール No. 91 号(2009/6/2)に掲載